

# 電子文字社会における「ことば」の変容に関する研究

Research on Language changes in The Electronic character Society

前納 弘武<sup>1</sup>  
Hiromu Maeno<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学人間生活文化研究所

キーワード：パロール、エクリチュール、電子文字、ロゴス

Key words : Parole, Ecriture, Electronic character, Logos

## 1. 研究目的

「ことば」は常に二面性を有している。声による「話しことば」（音声言語）と、文字による「書きことば」（文字言語）の二面である。ことばの研究は、この二面性を前提に進められてきたが、今日、日常生活のなかで目にする多くの電子文字は、従来の「二面性」アプローチでは十全に把握できず、第三の側面を考える必要があるのではないかと

パソコンやスマホの画面に映る「ことば」の多くは、もちろん文字の形態をとっている、この文字を本稿では「電子文字」と呼ぶことにするが、同じ文字だからと言って、電子文字も従来の活字文字と同質の「ことば」として扱ってよいものであろうか。

本研究は、この問題に対して、「ノー」と答える。「ノー」であるとするれば、活字文字と電子文字はどこがどのように違うのか。また、「声としてのことば」（音声言語）との差異は何か。本研究では、現代の電子文字社会における「ことば」の変容に焦点を当て、その特質を検討する。

## 2. ことば研究のパラダイム転換

本稿は、前年度に引き続き継続研究であり、前稿<sup>1</sup>での主要な問題点をより多面的に検討しようと試みる。それ故、前稿での仮設的提言を簡潔に整理しておくなら、今日、活字文字が著しく衰退し、それに代わる電子文字の隆盛のなかで、現代の言語と文化のあり方や、コミュニケーションの問題、あるいは、メディアに関わる諸問題の研究にあたっては、ある種のパラダイム転換が必要である旨を主張するものであった。

すなわち、本研究の底流を成すパラダイム転換

とは、音声言語にしても文字言語にしても、ことばを伝達の道具、コミュニケーションのメディアと捉える考え方が主流を成しているが、かかる常識的見解を一旦棚上げし、井筒俊彦の言語哲学にパラダイム転換の方向性を求めたのであった。

井筒は言う。「近代の言語学者は、社会的記号コードとしての言語、つまりラング、に対立するものといえますと、すぐ発話行為パロールを考えます。ラングとパロール、それが普通の考え方です。しかし実際は、ラングとパロールを対立させる以前に、ラングの底に潜んでいる深層意味領域というものを考えなくてはならない。それでこそ初めて、そのような、いわゆる意味の太古の薄暗がりから立ち現れてくるパロールの創造性というものが、本当に理解できるようになるのではないかと私は思います」<sup>2</sup>。

ここで井筒の指摘する「ラングの底に潜んでいる深層意味領域」、「意味の太古の薄暗がり」と形容される不可視の領域への着目が、本稿にいうパラダイム転換の内実には他ならない。つまり、普段、我々が駆使していることばの意味交換という行為、「パロールの創造性」というものは、井筒のいう「意味の太古の薄暗がり」、つまりは、「ラングの底に潜んでいる深層意味領域」から生み出されてくるものであって、ことばが生み出される、という事は、何らかの意味が生み出される不可視の領域、「深層意味領域」にまで視野を広げなければことばの問題は解けないと、井筒は指摘するのである。

## 3. パロールからエクリチュールへ

さて、以上のパラダイム転換の方向性から、我々は、ことばの原理的な把握に関して、2つのアプローチを引き出すことができる。ひとつは、伝達

の道具としてのインストルメンタルな側面からのアプローチ、もうひとつは、「深層意識領域」にまで遡って、「パロールの創造性」に繋がる次元でのアプローチである。後者のアプローチは、ことばが生成されて発語に至る原初的なプロセスに注目する。しかし、この段階で生成されることばは、言うまでもなく、音声言語であって文字言語ではない。原初的に、「意味の太古の薄暗がり」の中から、音声言語として生成されるプロセスを、言語学では「意味の文節化」と呼んでいる。この「分節化」の説明に関して、次の一節ほど適切なものはない。

「まず具体的な例から考察を始めよう。英語に weed という語がある。訳して『雑草』、ある辞書によれば、その意味は『必要のない所に生えた野草の草』、つまり不要の草。しかし、客観的実在の世界、すなわち自然界、には『不要の』草などというものはひとつも存在しない。そのようなものは、無限に複雑な自然物を見て、それらを秩序づけ、さまざまな目的に従って評価する人間の目によってのみ存在する。つまり weed という概念は、このような秩序づけ、類別、評価の結果なのであって、この意味において、それは人間のこころの独特な視点としての主体的な態度のあらわれにすぎない。」<sup>3</sup>

この「文節化」の営みのなかには、「実在の世界と言語との間には、与えられた素材を一定の方向に作り上げてゆく精神の創造行為が介在しており」、その創造行為が「パロールの創造性」を生み出し、ロゴスとしての言葉を生成すると考えることが出来る。ところが、人間の歴史のなかで、パロールの上にエクリチュールが重なるようになると、前者に内包していた「創造性」ないし「ロゴス」なるものが消失することとなった。

ここで言う「エクリチュール」とは、書記システム、文字システム、書き言葉であって、話し言葉、「パロール」と並立させて用いるが、このエクリチュールの出現をめぐって、井筒は次の様に述べる。

「文字に書き写されるとき、言葉は死ぬ。生命のみずみずしさは、そこにはない。生きた話し手も、生きた聞き手もない。書かれた言葉は中性化して、万人の前に投げ出されている。声を奪われた言葉は、ただ石ころのように、そこどころがっている。紙面に並ぶアルファベットの空ろな眼差し。」

こうした見解は、井筒に固有のものではなく、西洋思想の歴史的展開における音声中心主義の一端

を述べたものに過ぎず、そこで注目されるのは、「文字が言葉の生命を奪う」ということの意味である。これに関して、井筒は、「文字が言葉の生命を奪うというのは、話された言葉のなかに現前している（はずの）ロゴスとしての「意味」を消してしまう、ということである。エクリチュールは『現前』を脅かす」<sup>4</sup>結果を招くわけだ。

#### 4. ロゴスと言霊

ここにおいて、パロールのなかに内包していた「創造性」、言い換えれば、ことばを生成する精神の創造行為というものは、エクリチュールにおいては拡散してしまい、「話された言葉のなかに現前している（はずの）ロゴスとしての『意味』」は消滅する。

「ロゴスとしての意味の消滅」は、特に、アルファベットという表音文字の場合を前提にした立論であるが、翻って、漢字という表意文字を前提にして思考された場合においても相重なるところがある。今から 200 年以上もの昔、本居宣長は次の様に述べていた。

「古より文字を用ひなれたる、今の世の心をもて見る時は、言伝へのみならんには、万の事おぼつかなかるべければ、文字の方をはるかにまさるべしと、誰も思ふべけれ共、上古言伝へのみなりし代の心に立かへりて見れば、其世には、文字なしとて事たらざることはなし。これは文字のみならず、万の器も何も、古には無かりし物の、世々を経るままに、新に出来つつ、次第に事の便よきやうになりゆくめる、その新しく出来始めたる物も、年を経て用ひなれての心には、此物なかりけん昔は、さこそ不便なりつらめと思へ共、無かりし昔も、さらに事は欠ざりし也。（中略）文字は不朽の物なれば、一たび記し置つる事は、いく千年を経ても、そのままに遺るは文字の徳也。然れ共文字なき世は、文字無き世の心なる故に、言伝へとても、文字ある世の言伝へとは大いに異にして、うきたることさらになし。今の世とても、文字知れる人は、万の事を文字に預くる故に、空にはえ覚え居らぬ言をも、文字しらぬ人は、返りてよく覚え居るにてさとるべし。殊に皇国は、言霊の助くる国、言霊の幸はふ国と古語にもいひて、実に言語の妙なること、万国にすぐれたるをや」<sup>5</sup>

ここで宣長は、文字の出現によって、「文字といふ物のさかしらなくして、妙なる言霊の伝へなりし徳」というものが消滅してしまう事態を指摘す

る。宣長の言う「言葉の妙なる言霊」は、小林秀雄も指摘するように<sup>6</sup>、西洋言語思想、特にアリストテレスのいう「話された言葉のなかに現前している（はずの）ロゴス」に相当するとみなすことができる。アルファベットという表音文字の場合はもちろん、漢字を軸とする表意文字の場合でも、そのエクリチュールにおいてはことばの現前性を失ってしまうのである。

さらに、言葉に内在する現前性の消滅の他に、洋の東西を問わず、エクリチュールの空間性を指摘しておかねばならない。この点は、改めて指摘するほどのことはないが、パロールの構成する空間は限定的たらざるをえない。これに対し、エクリチュールの構成する空間は、無限にと言ってもよいほど拡大する特性を有している。この傾向は、既に現下の電子文字の場合において、現実のものとなっているが、その功罪については、匿名性の問題とも絡んで、実に複雑な問題を提起している。

## 5. 電子文字のエクリチュール

以上の空間性の拡張という問題も、電子文字の織り成すエクリチュールの一つの特性に違いない。これに加えてもう一つ、書記システムの根本的な変容を付け加えておきたい。

この第三の問題は、石川九楊のつとに指摘するところであるが、石川によれば、日本語を前提に考えれば、普段、我々は、漢字仮名交じり文のシステムに基づいて文を書く。ところが、電子文字の場合は、これまで慣れ親しんだ書記システムを捨て、ローマ字ないし平仮名で打ち込んで、漢字仮名交じり文に変換する。しかも、この変化は、誰も殆ど意識すること無く、無自覚のままに非本来的な方式に沿って電子文字のエクリチュールに委ねていくのである。

だとすれば、電子文字が構成するエクリチュールは、従来の肉筆文字を活字化した結果、そこに出る上がるエクリチュールとは同質のものではありえない。その影響は、特に日本語の場合、漢字、平仮名、片仮名の組み合わせからなる文字システムを作り出した日本人の「書く」という意識の変質にも及

ばざるを得ないだろう。

既にその影響は現れ始めている。電子文字のエクリチュールの中には、パロールとエクリチュールが融合したかの如きことばが氾濫し、その種のことばは、過剰に感情性の溢れたことばを生み出している。いまや、電子文字社会は、「感情優位社会」（カズオ・イシグロ）の様相を顕著にしつつある。そうした状況の中で、電子文字の織り成すエクリチュールは、「パロールの創造性」にみられたようなことばのロゴス性なり言霊性を取り戻すことができるであろうか。これが現下の大きな課題と言わざるを得ない。果たして、AIはこの課題を解決できるであろうか。

本格的な新しいエクリチュール論が生まれなければならない、と、私は思うのである。

## 注

- [1]前納弘武著「ことばの二面性についての研究—声と文字に関する基本的考察」（『人間生活文化研究』No.29, 2019.
- [2]井筒俊彦著『井筒俊彦全集第8巻 意味の深みへ』435頁。慶応義塾大学出版会, 2014.
- [3]井筒俊彦著『井筒俊彦全集第11巻 意味の構造』14頁。慶応義塾大学出版会, 2015.
- [4]井筒、前掲第8巻, 203頁。
- [5]小林秀雄著『本居宣長下巻』新潮文庫, 268-269頁。平成4年。
- [6]小林著、前掲書。
- [7]石川九楊著『「書く」ということ』文春新書, 平成14年。

## 付記

本稿は、令和2年度共同研究プロジェクト（炭谷晃男代表「電子文字社会における『ことば』の変容に関する研究」）の成果を筆者の文責において纏めたものである。